

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 18 日現在

機関番号：24701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25463334

研究課題名(和文) 死にゆく患者への看護ケアにおける看護学生の死の認知モデルの開発と評価

研究課題名(英文) Development and Evaluation of Models of Nursing Student's Perceptions of Dying Patients

研究代表者

鹿村 真理子 (Shikamura, Mariko)

和歌山県立医科大学・保健看護学部・教授

研究者番号：10143207

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：モデルの開発においては自意識尺度、多次元共感性尺度、援助規範意識尺度、死に対する態度改訂版日本語版尺度、独自に作成した質問紙の看護学生の患者に対する死の認知、属性、死についての経験を調査した。モデルは、公的自意識、私的自意識、被影響性、他者指向的反応、想像性、視点取得、自己指向的反応、死の恐怖、死の回避、死にゆく患者へのケア、死にゆく患者への思いの構成概念から成立し、モデルとして妥当な指標が得られた。モデルの検討から死について話し合うことの有用性が示唆され、教育プログラムでは死についての経験や家族の見取りなどについてディスカッションをした。介入群は、非介入群に比べ望ましい方向に変化した。

研究成果の概要(英文)：In developing the model, was conducted using a survey of Self-Consciousness Scale, Multidimensional Empathy Scale, Normative Attitude toward Helping, Death Attitude Profile-Revised Japanese version, Cognition of Student Nurses on Terminally Ill Patients, attributes and experience of death. Covariance structure analysis was used for the modeling. The constructs of the model were 'public self-consciousness', 'private self-consciousness', 'emotional susceptibility', 'others-oriented emotional reactivity', 'ability to imagine', 'perspective taking', 'self-oriented emotional reactivity', 'fear of death', 'death avoidance', 'care for the terminally ill patients' and 'feelings towards the terminally ill patients'. From the goodness of fit index, it is appropriate to say that the model showed good fit. As a result of having conducted educational program based on a model, the student changed in the desirable direction.

研究分野：基礎看護学

キーワード：死にゆく患者のケア 看護学生 モデルの開発 教育プログラムの開発 死に対する態度

1. 研究開始当初の背景

近年、多くの人々が医療施設で死を迎えている。さらに、死の儀礼においても葬儀社によって執り行われることが多く、死者に触れるという機会そのものが少ない。若い世代においては「死そのもの」をどうとらえるか、どのような死生観を自らのものにするかということが大きな課題である¹⁾。このような現状から、看護学生は、医学的な死というものは理解できても、死そのものの意味についてはよくわからないということになる。そのため、看護基礎教育においては、死ゆく人への看取りを将来になうことになる看護学生に対して死生観を育むことが求められている。しかし、看護基礎教育においては、終末期ケアにおける教育方法・内容・評価に関しては、模索の段階である²⁾。これらから、死生観形成に関わる教育は未だ不十分な状況にあると指摘できる。

2. 研究の目的

近年、超高齢化社会を迎えるに伴い、死亡人口も増加している。しかし、家庭において担われてきた看取りの文化は、すでに失われている。一方、看護学における死生観形成に関わる教育は、カリキュラムで提示された履修時間は少なく、十分な教育を展開することの困難さ³⁾が指摘されているように、未だ不十分な状況にある。このことから、看護学生に対し、死にゆく患者への看護ケアの行動化を促す教育プログラムの開発は急務である。本研究においては、看護学生が死にゆく患者と出会い、ケアの行動化までのプロセスを明らかにし、看護学生の死の認知モデルを開発する。さらに、看護基礎教育における死にゆく患者の看護ケアに関して、効果的な方法を考案し、モデルの有用性を評価することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 看護学生の属性と死についての経験、「自意識」「多次元共感性」「援助規範意識」及び「死に対する態度改訂版日本語版」「看護学生の患者に対する死の認知」の各尺度に関するデータによる、死にゆく患者に対する看護学生の認知モデルの開発を行う。

(2) 収集したデータを分析し、ケア場面における看護学生のケアの行動化を促進するための教育プログラムを開発する。影響要因である死に関する経験や学習により「死に対する態度」が形成され、さらに、影響要因である死に関する経験や学習が、「看護学生の死の認知」に影響を与えて、死にゆく患者へのケアの行動を引き起こすことを前提とし、教育プログラムを開発する。

(3) 教育プログラムを開発を行う。教育プログラムを実施し、看護学生の死の認知モデルの有用性を評価する。

4. 研究成果

(1) モデルの開発では、「援助規範意識」は他の変数と関係がなく、モデルとして成立しないために変数から除いた。各尺度を潜在変数として投入したがモデルとして成立しないために、観測変数である「公的自意識」「私的自意識」「被影響性」「想像性」「他者指向的反応」「視点取得」「自己指向的反応」「接近型受容」「死の恐怖」「死の回避」「逃避型受容」「死にゆく患者へのケア」「死にゆく患者への思い」を投入し、死にゆく患者に対する看護学生の死の認知モデルを作成した。

モデルの適合度は共分散構造分析の結果、(Goodness of Fit Index; GFI)=0.954、自由度調整済み適合度指標(Adjusted Goodness of Fit Index; AGFI)=0.922、比較適合度指標(Comparative Fit Index; CFI)=0.933、(Root Mean Squares Error of Approximation; RMSEA)=0.064であった。そのため、適合度基準を満たしモデルの有効性を示した。

「公的自意識」は、「自己指向的反応」「被影響性」「死にゆく患者へのケア」に関係し、「私的自意識」は、「想像性」「他者指向的反応」「視点取得」に関係していた。「他者指向的反応」は、「死にゆく患者へのケア」に関係し、「接近型受容」は「逃避型受容」に関係していた。「死の恐怖」は「死の回避」に関係し、「死の回避」と「自己指向的反応」は「死にゆく患者への思い」に関係していた。

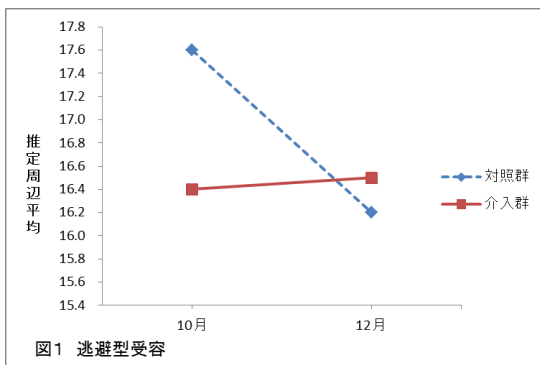
影響要因である終末期ケアの講義、読書の経験は、「死の回避」から「死にゆく患者への思い」に関係し、話し合いの経験は、「他者指向的反応」から「死にゆく患者へのケア」に関係していた。

(2) 本研究の結果から、死にゆく患者の看護ケアの行動化に「公的自意識」と「他者指向的反応」が関係し、死について話し合うことの重要性が示唆された。さらに、「死の恐怖」は「死の回避」に、「死の回避」は「死にゆく患者への思い」に関係があることから、死についてのネガティブな感情が死を避けたいという気持ちに繋がり、患者に対するネガティブな思いに関係することが示唆された。そのため、End-of-Life Careを教授する前段階として、基礎看護学において死に対する態度を育み死にゆく患者へのケアの行動化を促すためのプログラムを考案した。

プログラムの作成にあたっては、死についての感情や印象についてのディスカッションを通して、学生自身が死について抱いている感情と向き合い、「私的自意識」という死に関わる自己の感情と「自己指向的反応」という他者の様子に自己が苦しくなるという反応について理解する。さらに、「公的自意識」の他者の視線を意識させ自己モニタリングの視点から、看護学生という自分の立場を理解することを視点に置いた。

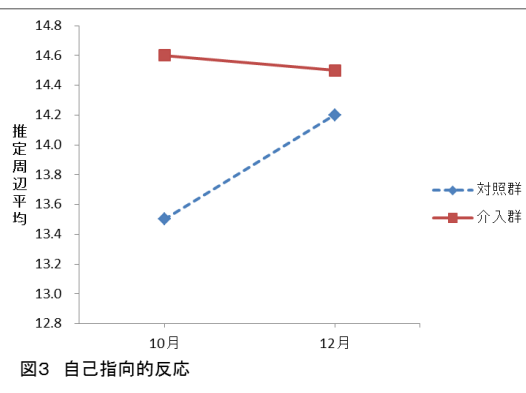
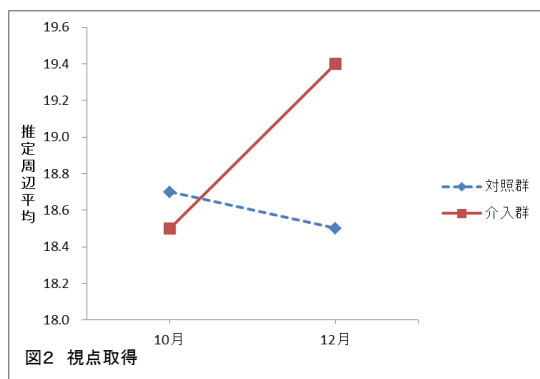
次の4つのテーマについて、学生間で話し合う。1.死に対する自己の感情を知る。2.生命倫理の観点から、死は誰のものか考える。3.事例から、死にゆく大事な人と向き合う家族の心情を知る。

(3) 2014年度生を対照群(以下 対照群)とし、2015年度生に開発した教育プログラムによる介入(以下 介入群)を行った。



介入の内容ではディスカッションを行い、身近な人の死の経験における感情や印象、出生前診断の事例からいのは誰のものか、在宅での看取りの事例から患者と家族の気持ち、についてであった。解析は、2元配置分散分析を行った。2(対照群・介入群)×2(時期:前/後)を2元配置分散分析した。介入は被験者間要因、時期は被験者内要因であった。交互作用が有意の場合に、単純主効果の検定を行った。

死に対する態度では、死の恐怖は時期の主効果が有意であった($p < .01$)。逃避型受容に交互作用を認め($F(1, 149) = 5.152$ $p < .05$)、単純主効果の検定で対照群が下降した($p < .05$)(図1)。看護学生の死にゆく患者に対する死の認知では、死にゆく患者へのケアは時期の主効果が有意であった($p < .001$)。多次元共感性では、想像性は時期の主効果が有意であり($p < .01$)、視点取得に交互作用を認めた($F(1, 149) = 8.420$ $p < .001$)(図2)。自己指向的反応で交互作用を認め($F(1, 150) = 7.355$ $p < .01$)、単純主効果の検定で対照群が上昇した($p < .05$)(図3)。自意識では、私的自意識は時期の主効果が有意であった($p < .05$)。



逃避型受容、視点取得、自己指向的反応において交互作用を認め、ディスカッションによる介入によりこれらが望ましい方向に変化したと考える。本教育プログラムにおいてその有用性が示唆された。以上から、モデルに基づいた介入の効果が得られたと考える。

<引用文献>

広井良典:死生観を問いなおす、ちくま新書、2001、9 - 18

園田麻利子、上原充世、終末期看護における基礎教育に関する文献的考察、鹿児島純大学看護栄養学部紀要、13号、2009、28 - 42

藤腹朋子、基礎看護教育課程におけるターミナルケア教育、ターミナルケア、8巻1号、1991、511 - 515

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

鹿村真理子、死にゆく患者に対する看護学生の死の認知モデルの開発、日本看護学教育学会誌、査読有、25巻3号、2016、1 - 12

[学会発表](計 3 件)

鹿村真理子、「看護学生の死にゆく患者のケアの認知」の関連要因日本臨床死生学会、2013

鹿村真理子、「看護学生の死にゆく患者のケアの認知」モデルの作成の試み、日本臨床死生学会、2014

鹿村真理子、岩根直美、坂本由希子、水田真由美、看護学生の死にゆく患者に対する死の認知モデルに基づいた教育プログラムの開発、日本看護学教育学会、2016

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鹿村 真理子 (SHIKAMURA, Mariko)
和歌山県立医科大学・保健看護学部・教授
研究者番号：10143207

(2) 研究分担者

水田 真由美 (MIZUTA, Mizuta)
和歌山県立医科大学・保健看護学部・准教授
研究者番号：00300377

坂本 由希子 (SAKAMOTO, Yukiko)
和歌山県立医科大学・保健看護学部・講師
研究者番号：20342272

岩根 直美 (IWANE, Nomi)
和歌山県立医科大学・保健看護学部・講師
研究者番号：90554527

(3) 連携研究者

高橋ゆかり (TAKAHASHI, Yukari)
上武大学・看護学部・教授
研究者番号：40341812

(4) 研究協力者

()